

6) 肺カルチノイドの検討

武田 敬子・秋田 真一 (新潟大学放射線科)
 小田 純一・酒井 邦夫
 渡辺 恒 (同 第二病理)
 広野 達彦 (同 第二外科)

肺カルチノイド、手術例9例について、そのレ線像を中心に検討した。(1)中枢型3例、末梢型6例と、末梢型が多かった。(2)非定型的カルチノイドは5例で、末梢型6例中4例は非定型例であった。(3)末梢型カルチノイドに特徴的円形腫瘍影は3例のみで、うち2例は定型例であった。(4)末梢型カルチノイド非定型例4例中3例は、何らかの不整像を有し、腺癌との鑑別が困難であった。(5)中枢型3例中、定型例2例は、気管支鏡にてカルチノイドの診断が可能であるが、非定型例1例は、扁平上皮癌との鑑別が困難であった。

7) 肉腫成分を欠いた肺芽細胞腫の1例

横山恵美子・伊藤 猛 (鶴岡市立荘内病院)
 梅津 尚男 (放射線科)

肺芽細胞腫は胎児肺に似た腺腔と肉腫成分とからなるきわめてまれな肺の悪性腫瘍である。この肺芽細胞腫の上皮性成分のみから成る腫瘍(病理学的命名は確立されていないがここでは肉腫成分を欠いた肺芽細胞腫という表現を用いる)と思われる症例を経験したので報告する。

症例は35才女性で、健診で肺野の異常影を指摘され、精査の結果右S¹の3cm大の境界明瞭平滑な球形様の腫瘍でB¹を圧排して発育することから良性腫瘍を疑われた。気管支動脈造影では腫瘍の辺縁より網状に分布する血管の増生があり、腫瘍濃染がみられたので硬化性血管腫が疑われた。切除標本では右S¹末梢、胸膜直下の肺胞による偽被膜に囲まれ、左排性に発育する腫瘍で、グリコーゲンに富む胞体をもつ胎児肺に似た腺腔をなす腫瘍であった。

8) 口腔癌放射線治療後の下顎骨壊死

末山 博男・垣花 泰政
 諸見里秀和・滝沢 義和 (琉球大学放射線科)
 中野 政雄

1984—1985年の間に、琉球大学附属病院(関連病院治療施設借用例を含む)にて治療した口腔癌新鮮例で、根治的放射線療法を施行した症例について、晩発障害としての下顎骨壊死発生状況とその治療過程について検討した。対象症例のTN分類はT3N1までで、舌癌20例、口腔底癌8例、歯肉癌4例、頬粘膜癌7例の計39例である。放射線治療は設備の関係から、後半の半年間は組織

内照射が可能となったが、それ以前は外照射と口腔内電子線照射が主体であった。2年以上経過観察した結果、下顎骨に隣接する下歯肉癌3例と口腔底癌1例に下顎骨壊死が発生した。4例すべて電子線口腔内照射例で、投与線量はTDF 150以上にみられた。発症時期は治療開始より7~24カ月で、そのうち2例は約2年で腐骨脱落をみた。限局性の場合、保存的治療で治癒可能である。

9) 頭頸部進行癌に対する照射前化学療法

末山 博男・諸見里秀和 (琉球大学放射線科)
 滝沢 義和・中野 政雄

昭和59年12月より62年1月まで、頭頸部進行癌新鮮症例に対して、局所制御率の向上、遠隔転移の防止、ひいては治療成績改善のために、照射前化学療法(CDDP+5-FU)を行った。これを2~3クール投与後、2週間以内に放射線治療を開始した。症例は男性24例、女性1例で、年齢中央値は56歳であった。病期はⅡが1例、Ⅲが6例、Ⅳが18例であった。化学療法の奏効率はCR 4例、PR 14例で72%であった。引き続き行われた放射線治療は、完遂例18例であり、終了後13例がCRとなった。化学療法でPRとなった症例は、放射線治療に良く反応した。なお1例は照射後手術を行い、結局最終治療で14例がCRとなったが、その後局所再発が4例、遠隔転移が2例出現し、8例が無病生存している。

10) ハイパーサーミアの治療経験

小林 晋一・新妻 伸二 (がんセンター新潟)
 清水 克英・佐藤 玲子 (病院放射線科)

61年4~62年7の1年4ヶ月の間に2回以上温熱療法を試みた11例について検討した。表在性5、腹腔内2、骨盤内3、胸腔内1例。61.4~11はオムロン、以降はノバザームいずれも13.56 MeHz, RF 加温装置を使用。

- 1) 方法は、照射との併用、加温々度は40℃以上、加温時間は4~50分。週1回、7回以上を目標とした。
- 2) 温度測定は熱電対温度計を使用。腫瘍内温度を測定できたもの6、近傍の管腔臓器内で測ったもの5例であった。
- 3) 加温回数は2回3例、3回2、5回1、6回1、7回4例。延加温回数51回、平均4.6回。加温時間は30~75分、平均61.5分。40℃まで上昇させるに要する時間5~50分。40℃以上持続温度の平均35分、41℃以上は15分。
- 4) 3回以上加温できた8例中PR 3例(37.5%)。